

コメ騒動の教訓

押谷 一

「歴史に学ぶ」、過去の出来事や先人達の経験したことをもとに、現在や将来に対する戒めである。

昨年の夏以降、いくつかの要因で米（コメ）の価格が高騰し「令和のコメ騒動」と呼ばれている。かつて日本ではコメは主食とされていたが、食生活が変化し、コメは主役ではなくなり、消費量は減少している。こうしたなかで深刻なコメ不足となったのである。歴史に学んでみよう。

稲作の歴史は、中国の長江下流、河姆渡（かぼと）遺跡から、約七〇〇〇年前の炭化コメや、稲作に使われていたと思われる道具が出土している。その頃が始まりと考えられており、日本には縄文時代後期に稲作が朝鮮半島、中国から北九州に伝わり、弥生時代後期には現在の東北地方にも稲作が広がっていった。

江戸時代には、大名が領地を治める「藩」と呼ばれる仕組みがあった。藩は大小およそ二〇〇あり、それぞれ石高（こくだか）によって経済力の目安とされていた。一石（いっこく）は、成人一人が一年間に消費するコメの量（約一五〇キログラム）に相当する。

江戸時代初期の耕地面積（田と畑の区分は不明）は約二〇〇万町歩―約二三〇万町歩とされている。一町は九九九一・七平方メートル

ルなので、およそ一ヘクタールである。ちなみに現在の日本の耕地面積は、田が二三三万五〇〇〇ha、畑が一九六万二〇〇〇haである。

島原松平文庫『御当家雜記』に収録されている「日本国知行高之覚」に記載によれば江戸時代初期、慶長三年（一五九八年）の全国の石高は、一八、五〇九、〇四三・七四石とある。

江戸時代初期のコメの平均収量は〇・九六三石（二・四俵＝一四四kg）／反であったとされているので一町あたり一四四〇kgの収穫とすれば、二八八万トン―三三〇万トンのコメが収穫されていたことになる。当時の日本（国という概念はなかったが）全土で、およそ一八〇〇万人を扶養することができた。

ところが、江戸時代にはコメの価格高騰や供給不足に対する庶民の反発によってコメ騒動が発生した。冷害や天候不良によってコメの収穫量が大幅に減少し、享保の大飢饉（一七三二年）、天明の大飢饉（一七八二―一七八八年）、天保の大飢饉（一八三三―一八三九年）など大規模なコメ不足も発生し、商人による買い占めによって、価格が高騰したが幕府は「市場原理」に任せていたため、結果的に価格が乱高下し市場は混乱し、コメ騒動につながった。

農林水産省によれば二〇二三年産の主食用作付面積は一二四万二〇〇〇ha（前年産に比

べ九〇〇〇ha減少）であった。水稻の全国の一〇a当たり収量を五三三kgと見込むと、収穫量は七一六万五〇〇〇t（前年産に比べ一〇万四〇〇〇t減少）と見込まれる。このうち、主食用の収穫量は六六一万t（前年産に比べ九万一〇〇〇t減少）だった。年間一〇万トン程度の減少が見込まれる需要に合わせ、一〇万トン程度の生産減少を見込む生産調整が正確に機能していた。皮肉なことに生産調整が機能していたことと不作が重なり二〇二三年産コメの「不足」状態を招いたのである。

江戸時代のコメ騒動は、コメの供給不足や流通の問題によって発生した。こうしたコメ騒動の経験を経験を現在に活かすためには、食料供給や流通のリスクを管理する観点から考えていくことが必要である。例えば、品種改良が進み、良質なコメを大量に生産できる北海道の生産を拡大すること、複数の流通ルートを確認することや価格の安定化や適正価格での取引を行うことによって生産者と消費者双方に利益があるような仕組みを作ることが必要である。

二〇二四年産の水稻の収穫量は、主食用で六七九万二〇〇〇トンとされている。コメの一人あたりの年間消費量は一九六二年の一・五八・三kgをピークに二〇二二年度は五・一・五kgとなっている。しかし、気候変動や、複雑な国際情勢によって今後も世界的にコメの収穫量の減少が見込まれることから食料の安定確保に対する危機感が増している。コメだけではなく農作物の国内自給率の向上は喫緊の課題だとコメ騒動のなかで思っている。

へおしたに はじめ・酪農学園大学名誉教授V